



十三 冬戻り？

「ごほごほ。先輩は練習が終わった後、いつもガムを噛んでいるんですけど、どうしてですか。気分転換ですか。ゴホゴホ」直人の咳は止まらない。しゃべると必ず咳が出る。

「ああ。これか。気分転換もあるけど、喉を守るためだ」

「ごほごほ。喉を守る？」

「春や夏、秋なら空気に湿気があるけれど、冬になると空気が乾燥しているだろう。走っている間に喉も渴くと、病原菌がひつつくんだ」

「だから、うがいをして洗浄するんですね。ゴホゴホ」

「でも、うがいでは喉の奥まで洗えないだろう。だから、ガムを噛んで唾液を出しているんだ。唾液には喉を洗浄する効果があるんだ。人間の体は上手い具合にできている。風邪が治らないんだったら、お前もやってみたら」

「ごほごほ。そうですね」これはいいことを聞いたと思った直人。早速、学校の帰りにでもコンビニで、喉飴とガムを買おう。

それにしても喉が痛い。咳が何度でも出る。だから、うがいをする。涙が出る。ほっとしておく、口びるまで垂れてくる。だから、急いで涙を吹く。だけど、いくらティシュペーパーで拭いても後から後から流れ流れてくる。鼻の中に涙水の地下水があつてそこから沸き続けているんじゃないか。涙水が湧き出て過ぎて。このまま体が枯れてしまうんじゃないかと心配になる。

「もう、帰れよ。直人」

「本当よ。もう帰った方がいいわ」

「頼むから、俺たちにはうつさないでくれよ」

先輩から、温かいのか、冷たいのか、どちらかわからない言葉を掛け、投げ、つけられる。

「はあ。でも、もうすぐ新学年だし、練習をしとかないと。ゴホゴホ・・・」

「何が練習だ。こんな体で練習したら、実力が落ちるだけだ」

「そうよ。休むのも練習のうちよ」

「頼むから、俺だけにはうつさないでくれ」

先輩からのやさしいのか、きびしいのか、どちらかわからない言葉を浴びせられる。

「ごほごほ。それじゃあ。お言葉に甘えて帰ります。ゴホゴホ」

直人はランニング姿に着替えたものの、サブザックを背負って、部室のドアを開けた。いつも以上に荷物が肩に食い込むように感じる。

「そうだ。それがいい。家でゆっくり休むんだぞ」

「帰りは気をつけてね。お医者さんに行った方がいいわよ」

「医者なら俺がいるぞ、でも、まだ免許は持っていないからなあ。後、八年たっても風邪が治らないならば、俺が診てやる。だけど、これで安心して部室にいられるよ」

先輩から、気遣ってくれているのか、邪険にされているのか、どちらかわからない言葉をいただく。頭を下げたまま、直人は部室を出た。そこには、Tシャツ、短パン姿のおじいさんが立っていた。顧問の岡田先生だ。この先生は、夏だけでなく、冬でもTシャツ、短パン姿だ。しかも

、その姿で自転車に乗っている。寒さ知らずだ。それとも感覚が麻痺しているのか。とにかく風邪をひいた姿をみたことはない。

「どうした。練習はしないのか。ハッハッハッハッ」

岡田先生はいつも会話の後に笑う。

「風邪を引いたんです。もう帰ります」

「そうか。それじゃあ、早く帰って寝ろ。体調が悪い時は、寝るのが一番だ。ハッハッハッハッ」

先生の笑い声を聞いていると、本当に心配してくれているのかどうか疑わしく思える。それでも、先生の笑い声を聞くと、風邪も吹っ飛んでしまいそうだ。風邪もこの人にはかなわないとあきらめて近づかないのだろう。

年中、Tシャツ、短パンで、しかもどこに行くのも自転車。車の免許は持っているらしいが、「俺は酒を飲むのが好きだから。だから車は運転しないんだ」が、持論。「でも、酒を飲んで、自転車の運転もダメですよ」と誰かが注意すると、「それなら押すだけだ。押した方がスピードは速いからな。アッハッハッハッ」と笑うだけ。実は、酒に酔いながら自転車に乗っているんじゃないかと疑うものの、本当のところは、近所に住んでいる娘さんが車で迎えに来てくれているらしい。

じゃあ。置いてきた自転車はどうなるんだと心配するけれど、朝五時には起床して、歩いて取りに行っているらしい。そんな面倒なことなら、お酒を飲まなければいいのに、と未成年の直人は思うけれど、「酒はいいぞ、酒は。お前も早く成人になって一緒に酒を飲もう」と誘ってくる先生はすごい。実際、部活の先輩たちは卒業し、無事、二十歳になると（ほっといても齢はとるけれど）学校にやって来て、山の中を走るなど、練習を終えた後に、先生と一緒にお酒を飲みに行くのが楽しみらしい。人はわからないものだ。

「お前も早く成人になれ。でも、今のうちは頑張れ」これが先生の口癖だ。

先生の温かいお言葉をいただいて、直人は自転車のサドルにまたがる。体が熱い。額に手を当てる。手も熱で熱くなっているので、額が熱いのかもわからない。

これはヤバイ状況なのは、自分でもわかる。酒に酔っているわけではないけれど、熱でふらふらしながら、なんとか自宅近くまでたどり着いた。時にはペダルを踏まずに、足で地面を蹴ったりもした。このまま家に帰って、ふとんに入ったら、目を覚まさないんじゃないかと不安になる。病院だ。さっき、中山先輩が言っていた。病院に行こう。直人は帰り道の診療所に自転車を向けた。

「ほう。熱いな。こっちまで熱くなりそうじゃ」ここは診察室の中。目の前には白衣を着た直人のおじいさんのようなお医者さんが座っていた。おじいさんは直人に向かって、手のひらを向ける。

直人は心の中で、俺はストーブじゃないぞ、と思いながらも、熱で頭がぼおっとしていたので口には出さずに、黙って聞いていた。

「多分、インフルエンザじゃな」の一言。「確認の検査をする」。おじいさん医者は。直人の鼻を上に向けると、看護師から手渡された棒を突っ込んだ。

「痛い」直人の渴いた口びるから言葉が漏れた。

「痛くはないじゃろ。熱いはずじゃ」。おじいさん医師は直人の棒を鼻の中でぐるぐると回すと棒を鼻から出して、看護師に手渡した。

「先生、治りますか」直人はかすかに開いた口びるから言葉を出す。だけど、唇が乾燥していると言葉まで乾燥しているように聞こえる。

「ああ、治るとも。薬を飲んで、家で四日から五日はゆっくり休みなさい。ちゃんと治さないと、他の人にうつるからな。ああ、家の人にもちゃんとインフルエンザだと言うんだぞ」

「あっ、はい」

直人はぼうっとした頭で、素直に返事をした。

「結果が出るまで、待合室で待っていてね」看護師さんのやさしい微笑みに、直人は首を縦に振った。

「直人。大丈夫？」

直人が目を開けると、目の前には母の顔があった。

「どうしたの？熱があるの？」母親が熱で温かくなったタオルを除けて、直人の額に手を当てる。

「インフルエンザなんだ」唇が渴いているので、自分の声じゃないみたいだ。

「あら、大変」母親は全然、大変なさそうな声で、「何か、食べる？」と聞いてきた。直人は何も欲しくはなかったけれど、ただ、熱のせいか、口の中が砂漠のように渴いていた。

「何か、飲み物が欲しいな」

「じゃあ、何か作るわ」母は直人の部屋から出た。階段を下りて行く音がした。しばらくして、階段を上って来る音がした。小気味良いリズムだ。

「はい、どうぞ」お盆の上に乗っているのは、黄緑色の液体だった。どう見ても食指が動くものではない。いきなり草食動物になった気分だ。

「バナナでしょう。りんごでしょう。それに、ほうれん草、パセリ、にんじん・・・」直人がジュースを飲む前からまずそうな顔をしたので、母がいかに成分が健康にいいのかを説明した。直人はジュースのレシピを聞いたかった訳じゃないけれど、母の講釈を聞きながら、それでも風邪が治るのならとグラスに口をつけた。カラカラに乾いた口の中に、バナナやリンゴなどの果物とほうれん草やパセリ、にんじんなどの野菜のオアシスが広がった。

「美味しい」見た目以上に味はよかったので、直人は一気に飲み干した。

「そう。それはよかったわ。ゆっくりと寝なさい」母が、いくつになっても子どもは子どもなんだと確認するように、満足そうな顔をした。

体中が熱さでほてりながらも、直人は眠りについた。翌日も、直人は学校を休んだ。ようやく熱が引き、その翌日は土曜日、日曜日だったので、学校を休まなくてもよかった。直人は走りたかったが、母親から「また、ぶりがえすわよ」と諭され、家で大人しくしていた。

月曜日。「行ってきます」体調が戻り、直人は家をママチャリで飛び出した。二日しか休んでいないけれど、一年ぶりに学校に来たような気がする。授業が終わるとすぐに、部室に駆け付けた。先輩たちはまだ来ていない。窓を開け、部屋の掃除をしていると、荒木先輩がやってきた。

「おっ、治ったか」

「はい」直人は元気よく答える。

しばらくすると、中山先輩もやってきた。

「早く治って、良かったわね。あっ、そう。先週の金曜日に、自転車に乗った女子が直人君を尋ねて来てたわよ」

「おっ、京子ちゃんだな。久しぶりだな。会いたかったな」荒木先輩が悔しそうに顔をゆがめる。

「荒木君じゃないわよ。直人君によ」山中先輩が荒木先輩を睨みつける。首をすくめる荒木先輩。

「山田さんが？」

「ええ。風邪で休んでいるって言ったら、また来ますって言ってたわ。あの娘、うちの学校？」

「そうです。クラスは違うけれど、同級生です」

「誰かさんと違って、素直で、いい娘だよなあ。ああいう娘に、うちの部活にぜひ入ってもらいたいもんだよ」荒木先輩が腕を組んで大きく頷いている。

「荒木君は黙っていてよ。関係ないんだから。それに、さっさと走りにいったら」中山先輩がガムを吐き捨てるように言う。

「おお、恐。じゃあ、お先に失礼」荒木先輩がおどけたように部室から飛び出た。はずの、荒木先輩が顔だけ部室に向けた。

「噂をすれば何んとかだ。直人。お客さんだよ」

荒木先輩が開けたドアから京子ちゃんの顔が見えた。急いで立ちあがる直人。

「どうぞ。どうぞ。汚ない部室だけど入って」中山先輩がやさしく手招きをする。

「そうだよ。そんなところに突っ立ってないで、椅子に座ったら」練習に出掛けようとした荒木先輩も部室に戻ろうとする。

「荒木君はさっさと練習に行きなさい」荒木先輩に石を殴りつけるようにガツンと言う中山先輩。

「ひえー。行ってきまあす」強面の荒木先輩だけど、中山先輩には頭が上がりず、尻に敷かれた状態だ。

「がんばってください」笑いながら京子ちゃんが見送っていた。

「むさ苦しい奴がいなくなったから、これで安心して、部室に入れるわよ」

中山先輩は荒木先輩への態度とは打って変わって、微笑みながら、京子ちゃんを迎える。

「いえ。あたしも今から練習なんです」京子ちゃんは既に自転車の練習着に着替えており、その傍らには自転車があった。

「そうなの。もし、よかったら、うちの部に入らない？」

「えっ。あたし、あまり走るのには苦手なんですけど」

「自転車で走るのも。自分の脚で走るのも、同じよ。それに、あたしも自転車をやっているわ」

知らなかった。中山先輩が自転車に乗るなんて。直人は驚く。

「それに、水泳もやっているの」

「じゃあ、トライアスロンじゃないですか」京子ちゃんの目が宝物を見つけたみたいに輝く。

「あたしも将来的には、トライアスロンをやりたいと思っています」

「じゃあ。一緒に練習しましょうよ。うちの部は、走るのも、自転車に乗るのも、泳ぐのも、山に登るのも、全部自由よ。それぞれが思い思いの練習をしているだけ。それで、一緒に練習できる部分があれば、一緒にやるだけよ」

「わかりました。入部します」京子ちゃんは大きく頷いた。返事が早い。やったあ。直人は二人に気付かれないように右手で小さなガッツポーズをする。

「それじゃあ。早速、合同練習よ。山田さんは自転車で山に登って。あたしたちは走るから。ゴールは展望台よ。知ってる？」

「はい。直人君に教えてもらいました」

中山先輩が直人の顔をじろりと見る。えへへとは言わないものの、うつむきながら頭をかく直人。

「じゃあ。行きます」京子ちゃんは自転車に乗るとペダルを漕ぎだした。

「さあ。あたしたちも行くわよ」中山先輩が笑顔で振り向いた。

「ありがとうございます」直人は感謝の意味を込めて頭を下げた。

「別に、あなたのためじゃないの。練習仲間が一人でも多い方がいいでしょう。それに、荒木君やあたしが抜けた後でも、この部を存続して欲しいからよ。さあ、練習よ。ぐずぐずしていたら、京子ちゃんを待たせることになるわ」と部室を飛び出した。「部室のカギを締めといてね」の言葉を残して。

「ちょっと、待ってくださいよ」

直人は慌てて部室のカギを閉めると、ピンクのランシャツとランパンの後を追った。夕陽を浴びたその後姿は、直人には目を開けていられないほど眩しく感じた。